

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 建造物部会（第32回）

議事録

日時 令和5年2月10日（金）14:00～15:40

場所 西之丸会議室

出席者 構成員

| | | |
|-------|---------------|-----|
| 小濱 芳朗 | 名古屋市立大学名誉教授 | 座長 |
| 溝口 正人 | 名古屋市立大学大学院教授 | 副座長 |
| 麓 和善 | 名古屋工業大学名誉教授 | |
| 小松 義典 | 名古屋工業大学大学院准教授 | |

オブザーバー

浅岡 宏司 愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室主査

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

議題 (1) 表二の門附属土塀の雁木の調査について
(2) 余芳の実施設計について

配布資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 建造物部会（第32回）資料

| | |
|------|--|
| 事務局 | <p>1 開会</p> <p>2 あいさつ</p> <p>今日は寒い中、また足元が大変悪い中、建造物部会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>本日の議題ですけれども、表二の門附属土塀の雁木の調査について、他2題です。まず議題(1)表二の門の雁木の今年の調査の報告をし、来年度の調査計画についてもあわせてご説明します。また、議題(2)として、余芳の実施設計についてご説明をし、先生方のご意見をいただきたいと考えています。短い時間ですけれども、忌憚のないご意見をいただきますよう、よろしくお願いいたします。</p> <p>3 構成員、事務局、オブザーバーの紹介</p> <p>4 今回の議事内容</p> <p>資料の確認をいたします。会議次第と出席者名簿をA4でお配りしていきまして、その後、本日は資料1としてA3で5ページ、ページの下にページ番号が振ってあります。資料1は5ページまでになっています。それから、資料2が余芳の実施設計についてで、A3で4ページまでの資料となっています。説明の参考資料ということで、別添資料をA3で3枚、右方に別添1と書いてあるものと、2と書いてあるものと、もう1つが石の写真の資料を参考にお配りしています。それから、昨年の夏に文化庁へ提出している復元検の資料をA3で100枚ほどの束にしてあります。途中で議論の参考に使う時があるかもしれませんのでということで、机の上に置いてありますので、適宜ご利用いただきたいと思っております。</p> <p>それでは早速ですけれども、議事に移りたいと思っておりますので、ここから先は小濱座長、よろしくお願いいたします。</p> |
| | <p>5 議事</p> <p>(1) 表二の門附属土塀の雁木の調査について</p> |
| 小濱座長 | <p>最初に資料について事務局から説明をいただいた後、構成員の皆様にご意見を伺いたいと思っております。</p> <p>議題の(1)ですね、表二の門附属土塀の雁木の調査について、事務局から説明をお願いします。</p> |
| 事務局 | <p>今年度実施した試掘調査は、本丸表二の門の大規模修理工事の計画に伴って、雁木を復元整備できるかどうかの可能性を検討する目的で実施しました。調査が8月の下旬から9月の下旬にかけて、4つ</p> |

の調査区、資料図1の赤塗りで示している箇所、合計約36㎡の範囲で行い、地表下と石垣面に残る雁木の痕跡と土塁の残存状況を確認しました。

各調査区の成果をご説明する前に、全体の成果の概要をご説明します。1つ目です。すべての調査区において土塁の斜面の下端で、上面の高さが揃うように横並びで切石を計7石検出しています。そのうち1か所では切石が抜き取られて、その部分だけ山砂で埋められている状況を確認しました。これらの切石が雁木の最下段の可能性があると考えています。2つ目です。調査区に面した石垣を観察したところ、階段状に加工した痕跡を確認しました。この階段状の痕跡は雁木の痕跡である可能性が高いと考えていますが、その階段状の痕跡を追っていったところ、出土した切石とは一致しませんでした。3つ目、すべての調査区で土塁の斜面部の発掘調査を行ったのですが、その斜面中には円礫が詰まっているような状況であることを確認しました。これらが雁木の背面構造である可能性があると考えています。

続いて、調査区ごとの具体的な調査成果をご説明します。

まず表二の門の東側の土塁を調査した調査区3、4です。土塁の斜面の下端で、標高が揃うようなかたちで切石を検出し、その側面に着目すると、図3、4の赤い矢印で示しましたが、黒く変色した線を2本確認しました。この2本の変色線が切石同士で高さが揃っていることから、ある時期の地表面を示していると思われる。石垣面については、階段状の加工痕を土塁の斜面の中ほどから上端にかけて確認しました。この階段状の加工痕は、雁木の石材を設置する際に、石垣面に噛み合わせるために加工を施した痕跡であると考えています。また、土塁斜面の上部の附属土堀控柱の周辺については、資料2ページ目の図7で示しています。控柱周辺では比較的大きい円礫や角礫が集中しています。また、土塁の土層の断面を確認したところ、後の時期にここの部分だけ掘っているような痕跡を見られたことから、近代に控柱を改修した際に設けたと思われる根固めではないかと考えています。こうした控柱の根固めが各調査区で確認することができました。また、調査区4では図の8で示している切石の上面と同じ高さまで土塁の斜面を掘り下げましたが、円礫が詰まっている中に瓦片が混じっている状況から見ると、この出土した切石は築城期に設置されたものがそのまま残っているわけではなく、後の時代に積み直されたものである可能性が考えられます。また、この調査区3、4の平坦部については、近代と現代の攪乱の影響を強く受けており、この攪乱を掘り抜いたところ、底面で近世の層を確認することができたのですが、出土した切石の側面に据えつくような当時の地表面は、攪乱によって確認することができませんでした。

続いて3ページ目です。調査区5、6の成果をご説明します。こちらの調査区でも、斜面部の下端で、先ほどと同様に横並びで切石が出土しました。調査区5については、図12に示したとおり、1か所で切石が抜き取られていました。この抜き取り痕を精査したところ、

切石の背面に円礫がかなり密に詰まっているということと、切石の底面に関しても円礫が詰まる状況があるというのを確認しています。調査区5、6の平坦部に関しても、木柵であったり、センサーを設置した際の近現代の攪乱が見られて、近世層を面的に確認することができませんでしたので、センサーの基礎の攪乱を利用して、深掘りを行いました。その結果、攪乱の直下に近世層と思われる均一な砂質土の層があり、さらに下層には資料4ページの図15で見えるような白色の粘土塊を多く含む近世盛土層を確認することができました。

これらの調査成果を雁木の要素ごとに整理したのが出土遺構の評価になります。まず切石については、東西の土塁で上面の高さが10cm異なっていますが、それぞれの土塁の中の切石は横並びで高さが揃っていて、この石材の表面の加工も丁寧に仕上げられています。切石の大きさに着目すると、高さとおよそ30cm前後になっていて、城内の雁木事例と比較しても類似した形状といえると考えています。また、出土位置を見ると、土塁の裾部に当たる位置で出土し、現地の地表面と比べて、調査区3、4では同じ高さに切石上面があり、5、6では地表面より約10cm高くなっています。この下の高さと表二の門の鏡柱の礎石上面を比べると、その比高差約10cmほどです。この切石の側面には変色線も見られることから、これらは雁木の最下段である可能性が高いと考えています。雁木の最下段のみが残存していることについては、名古屋城の絵図の検討を昨年度実施して、そこで大正8年以降の絵図になるとこの雁木の描写がなくなって土塁の描写になるということから、その頃に最下段より上の部分が取り外されて、最下段だけが残置されたものであることが今回確認できたと考えています。ただ、この切石の表面状態を見ると、今見えている表面よりも底面のほうが丁寧に成形されている切石もあり、こうした痕から瓦片が出土している状況もあることから、この切石自体は当初の築城期のものではなく、後に積み直されたか、化粧面が返されている、そういった状況のものではないかと考えています。

続いて、石垣面の加工痕については、すべての調査区で階段状の加工痕を確認しています。こちらを示したのが図16です。矢印で示している部分が階段状の加工痕の出隅の部分になります。図中でも、矢印の数が4つ程度になっていることから分かるとおり、雁木の形状をこの階段状の加工痕によって確定することはできず、部分的に加工痕が残る状況であると確認しました。背面構造としては、土塁斜面で多くの円礫を検出し、こちらが背面構造の可能性があると考えていますが、斜面の現地表面から約50cmほど掘り下げても、まだ円礫中に瓦片が混じっている状況です。このことから明らかに当初の雁木の背面構造は、今のところ確認できていないということになっています。

資料5ページ目です。今回の調査成果と城内の雁木を比較検討しています。石垣の面の加工痕については、先ほどの4ページの図16

| | |
|------|---|
| | <p>の下のほうで榎多門の雁木の加工痕を同様に載せています。榎多門のほうがかかなり明瞭に階段状の加工痕が確認できるのですが、形状としては表二の門と榎多門はかなり近似した加工痕を施しているのを確認できています。切石の大きさについては、城内の雁木の事例と同様に計測したところ、雁木自体の平均値に出土した切石の大きさが近い数値でした。また、この雁木の形状の中に収まるものであるというのが確認できました。</p> <p>ここまで今年度の試掘調査の成果を簡単にご説明しましたが、まだ雁木を復元整備するにあたっては課題が残されています。今回雁木の最下段を確認することができたのですが、今回は土塁の石垣際のみを調査範囲とし、これが土塁の中央部にどのように続いていくのか、中央部でどのように残存しているのかというのが不明です。また、この切石の時期についても検討を続ける必要があると考えています。また、雁木の段数や背面構造についても、未だ不明瞭な状態となっています。</p> <p>こうした課題を解消するために、来年度改めて発掘調査を実施することを計画しています。調査の目的としては、引き続き雁木の復元整備の検討を第一とし、先ほど挙げた課題、切石の残存状況や時期、背面構造などを検討することを考えています。調査の方法では、土塁全面、約72㎡を調査範囲とし、土塁全体の状況を確認したいと考えています。図17の黒い枠で示しているのが、来年度の調査範囲の計画している箇所になります。このうち赤く塗りつぶしている今年度の試掘調査の範囲では、試掘調査の際に完全に埋め戻しをしておらず、遺構面を土嚢で養生しているのみであることから、発掘調査にともなって、今年度の部分については土嚢を外して、全体の状況を確認したいと考えています。</p> <p>発掘調査の掘削に関しては、近世の遺構面の検出までを原則として考えていますが、検出遺構の時期や性格を把握するために、必要最小限で断ち割り調査を実施したいと考えています。その際には、今回円礫の中にまだ瓦片が混ざっているということで、こちらについても一部取り外して、そのさらに下に当初の雁木の背面構造が残存していないかについても確認したいと考えています。</p> <p>説明は以上になります。ご意見をよろしくお願ひします。</p> |
| 小濱座長 | <p>ありがとうございました。それでは、ご意見、ご質問等ありましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。</p> |
| 麓構成員 | <p>よく分からないことがあるから、また今年度発掘調査をすると。面的に広げるといふのと、もうちょっと断ち割って、深い部分で、古い背面構造の痕跡がないかを確認するということなんですけど。そもそも当初に雁木を築くにあたって、どういうことをやって、積み直しをする時に積み直し作業としてどういうことをやったか。それはある程度想定できますか。</p> <p>つまり、今回はよく分らなかった。もっと深く掘ったら出てくるんじゃないかというような、そういう発想に見えるんですけど、</p> |

| | |
|------|---|
| | 今の説明だけだとね。本当にもっと深いところにあって、表面だけを積み替えているのだろうか。 |
| 事務局 | そこがかなり、ちょっとまだ詰められていないところです。 |
| 麓構成員 | <p>詰める、詰められていないというより、そもそも最初雁木を積む時に、どんなふうやって、背面構造はおそらく当初はこうだろう。それを、かなりガタガタして積み直すと思うんですね。積み直しをするということは、ガタガタしているのを直す。それを直す時に石を外しますよね。その背面構造をまたもっとしっかり積み直しますよね。それがある程度背面構造を取って、また詰め直す。その詰め直す時に、後世の瓦片みたいなのが混じる可能性は当然あるんですけど。もっと深いところに当初のがあって、積み直しの時はその背面構造の表面だけを外して積み直す。そういう仕事を果たしてするのだろうか。そのへんがちゃんと理解できていなかったら、要は当初の背面構造って、当初の雁木の下の地業をガタガタしたら、それ全部取って、もっと盛土か地山面を削って、また新たな事業をしたとしたら、当初のものは全部なくなって、次のことをやるということになりますよね。そういう積み直しをするにあたって、どういう作業をするんだろうかということが分かっていないと、ある程度想定ができないと。単純に、よく分からなかったのもっと掘ったら下に残っているかもしれない、というのは、そんなにうまく期待した成果が出るのかなという気がするんですね。</p> <p>それともう1つ、今の塀の控柱の部分あったでしょう。あれも現在の控柱ですよ。あの控柱にしても、木製の控柱が腐って、それをやり替えると思うんですよ。やり替える度に、柱位置は変わってなければ、同じ位置にしますよね。その時に1回掘って、また控柱を立てて埋め戻すっていうようなことを、何度かやるでしょう。そういうものが単純に近代にやり直したものです、というのは分かっても、じゃあその前に何回そういう控柱の据え直しをしたんだろうかとか。そういうことを明らかにできるような発掘調査をしないと、見落としてしまうと思うんですよ。そもそもそんなことはできないかもしれないし。そのへんのある種の見通しがなくて、今の現状の判断と、もうちょっと調査をしたら明らかになります、というような、そういう説明に、今聞こえたんですけどね。</p> |
| 事務局 | 今年度は、私たちも雁木の調査は初めてということもあって、とりあえず近世の面のところで止めた状態になっています。1つは、そこで止まっただけは本当に最後のところしか分かりませんので、そこはもうちょっとしっかりやりたいということと。もう1つは他の城郭の雁木や、城内の他の雁木など、そういったところの検討がちょっと不十分だと。石垣・埋蔵文化財部会の先生にご相談した時にそういった調査の目的が、本当に目的と内容があるかというご指摘もありましたので。もう一度そこは検討するつもりで、今取りかかろうと思っています。 |
| 麓構成員 | それと、もう1つ。石垣の面にきれいに加工したところと、もう |

| | |
|------|--|
| | <p>ちょっと粗いままのところとがあって、ちょうど角も出ているという。それが規則正しくは出てこなくて、本当にこれが雁木の角なんだろうか、というようなことですよ。要するに、雁木を積んで、隠れてしまうところまで表面をきれいに加工するんですよ。発掘して今見えた綺麗な面の角が、そのまま雁木の上外角にあたるとは思わないほうがいいでしょうね。</p> |
| 小濱座長 | <p>麓先生がいわれたように、雁木の積み直しというのは行われていたんですか、過去に。当初の雁木があるでしょう。それから積み直されているんですか。どうなんですか。</p> |
| 事務局 | <p>江戸時代の記録がまったく残ってなくて、正確なことは分からないです。発掘調査の状況を見ると、積み直されている可能性が高いのではないかと考えています。</p> |
| 小濱座長 | <p>そうすると、背面がどうか、掘削しても分からないみたいな。これはいつのあれなのかというのが、またよく分からないですね。</p> |
| 事務局 | <p>今は瓦が見えているところで止まっていますので。おそらく近世になって触ったので瓦が中に入っていると思うのですが。それを外したら元の形が見えるかということ、必ずしもそうではないというのが、麓先生のご指摘で。きっとそんなに位置が変わるような造作ではないでしょうから、元の遺構が残っているかどうかは正直分からないのかなと、思った次第です。</p> |
| 小濱座長 | <p>積み直しもされているかどうか、分からないということですか。</p> |
| 事務局 | <p>瓦が入っている段階で積み直したんじゃないかという想定はできるとは思うんですけども。では、その前はどうかだったのか、それがいつなのかということまで、今後の調査で分かるかどうかは、今は何ともいえません。</p> |
| 小濱座長 | <p>だけど、瓦が入っているのが雁木かどうか分からないわけでしょう。雁木の石段になっている状態で、裏込の土に瓦が入っていたということですか。</p> |
| 事務局 | <p>そうですね。こちらの図12の抜き取り痕を見た際、切石を設置した状況の背面と底面を確認することができたのですが、そこでも瓦が円礫に混じって入り込んでいるような状況がありましたので、この切石を設置した際の背面構造には、瓦が入っていたのは間違いないかなと考えます。</p> |
| 麓構成員 | <p>石垣際が、石垣の面がきれいに加工してある面と粗い面と、それが雁木上に見えるから、やっぱり雁木を取り付けようとして、こういう加工をしたんだろう。だから、雁木はあったんだろう。それはいいですよ。残っていた一番下の1段目の石が、本来見えている面をきれいに成形していたはずが、それが下になっているとか、加</p> |

| | |
|-------|---|
| | 工の仕上げの程度と、見えがかりか、見え隠れかの違いもあって、だからこれは積み直しているんだろうと。それと、今いったその下には瓦片もあるからということで。だから、積み直しはしたんだろう、とね。何回かは分からないけどね。 |
| 事務局 | そうですね、はい。 |
| 溝口副座長 | 昨年現場を拝見して思ったんですけども、図9を拝見すると、礫が出てきたある所で止めているんですよね、断面。トレンチをガバッと入れているわけではなくて。 |
| 事務局 | そうですね、はい。 |
| 溝口副座長 | 昨年現場で拝見したところ。それが例えば、図9の10なんかは、瓦が入っているというわけですから。粘土塊を含んでいるから、白色粘土が入っているというのは、突き固めたという。それをどこか崩して。さっきの麓先生の質問で、当初の部分で、きちんとした地形をやったうえで、その上に積んでいる可能性もあるわけですよね。土層の断面をもう少し確認できるところまでトレンチを入れられるんだったら、というか、攪乱を受けていることを前提で掘り下げるわけですけど。そこでもう少し注意深く観察する必要があるかと思いました。図9の10の層で、ここに瓦片が入っているけど、この10の層がどこか。この下の白抜きのところはまったく地山という話ではなくて、一旦ここで止めているということですね。 |
| 事務局 | そうです。平坦面は近世層を確認できたのですが、斜面に関しては、どこの面で止めているというわけではなく、今の段階でとりあえず止めたという。 |
| 溝口副座長 | 当然のことながら、次年度の発掘も、図7に見えるところも、まずは表土を外して、様子を見ながら可能ところはもう少しトレンチを入れて、土層断面を見ていくということですね。 |
| 事務局 | はい。そんな考えです。 |
| 溝口副座長 | 先ほどの麓先生のご質問にあったのは、例えば、控えのまわりが当然掘っ立てなんで、何回も入れ直しているんだけど。そこは瓦と礫ですね。他に遺物は、出てきてないのですか。 |
| 事務局 | 今年度に関しては出ていないんですが、令和元年度に、1ページ目の図1の青色で示していますが、こちらで控柱の破綻部まで1度確認しています。その際、その一番根っこの部分に鉄製のボルトが刺さっている状況がありましたので、今ある控柱に関しては、近代以降に改修されているものと考えています。 |
| 溝口副座長 | 麓先生もおっしゃっていたように、この手の柱は、当然だいたい同じ位置を狙って入れていくので、平面で剥がしていてもなかなか |

| | |
|-------|---|
| | <p>遠い。掘って、置いて、また入れるので。穴がたぶん重なっているというか、掘り方が。礫だととても見にくいんでしょうけれども、そのへんはやはり注意深く。ここが近代という話がちょっと気になるんですけどね。だからといってガサッと掘っちゃわずに。とつても見にくいんですけど、こういうところって。私の経験からいくと。そこは当然どうなっているかということに注意深く。ここやり直しているから近代、というんじゃないで、近世でも石を積み直している以上は当然、控はもうちょっと短いピッチで、定期的に直しているでしょうから、そのへんを注意深く観察しながら、発掘していく必要があると思います。</p> |
| 事務局 | <p>基本的に場所というか、控柱の位置が動くということはあまりなくて、同じ位置でやり換えるということですね。このまわりを精査するという。最後がけっこう大きく掘っていますので、なかなかまわりに遺構が残っているかどうかわかりませんが。来年は面的に計画をしています。</p> |
| 溝口副座長 | <p>そうですね。昨年のものだとちょっと情報が限定されていて、現場で発掘されてるってのもあるとは、まあ、しょうがないです。まずは、あそこで止めているので。もうちょっと下まで見ないと、先ほどの地形の話も含めて。あの粘土が混ざっているのはちょっと気になりますけどね。本丸御殿とかでもそういうのは全然なかったの。何らかの初期の地形といいますか。そういうのと関係している可能性はありますね、白色粘土が入っているということは。ひょっとするとそういうことが、どこか入れられるところで、トレンチが入ると分かるかもしれません。</p> |
| 小濱座長 | <p>1つ質問いいですか。図 16 で、石垣に加工痕があるけど、私も現場説明を見に行っただけで、よく分からなかったんですけど、加工痕というのはどんな痕なんですか。水平なのか、垂直なのか。雁木だから、この切石がこう置いたあれですから、踏面の面が当たれば水平の線になるし、蹴上の部分だったら垂直の線になるけど。この加工痕というのはどういう性質のものなんですか。</p> |
| 事務局 | <p>基本的には段状に見えていまして、蹴上の部分も踏面の部分も確認できるような状況になっています。</p> |
| 麓構成員 | <p>石垣として見えるところは丁寧な仕上げ、道具も丁寧な仕上げ用の道具を使って石の表面をきれいに仕上げる。で、石が当たって隠れてしまうところはそこまできれいにする必要がないから、荒れたままにしておく。その差のことをいっている。</p> |
| 小濱座長 | <p>その差が加工痕になって現れているわけですね。</p> |
| 溝口副座長 | <p>最終的に石を積んだ状態で、適当に積んでいるわけではなくて、隅のところから積んでいきますから。ここは隠れるから、ここまでにしようと。</p> |

| | |
|-------|--|
| | |
| 小濱座長 | 見えるところはきれいにしましょうと。なるほど。そうすると、明確に現れたら段状に出てくるような感じなんですね。 |
| 麓構成員 | 隠れればいいから。実際に取りつくより奥まできれいに仕上げるのが普通です。そのちょうど際で仕上げないで、それよりさらにあと1寸ぐらい奥までやるとかね。必ずしもその角が出てくるから、ここだとは思わないほうがいいということのをさっきお話したんですけどね。 |
| 小濱座長 | 現在のこの加工痕だけでは、どの程度の情報が分かるかしれませんけれども。踏面、蹴上、それとも段数か、どの程度分かっているのですか。 |
| 事務局 | ひとつひとつの形状が本当にまちまちで、蹴上というか、高さが20cmしかないものもあれば、40cmぐらいあるものもあります。ここから本当に正確に1段の大きさというのが、今判断できていない状況で。段数に関しても、上から下までずっと階段状のやつがあるというのは確認できなくて、部分的にしか見えていないような状況です。 |
| 溝口副座長 | まさに麓先生がご説明いただいたような状況だと思います。別に見えず、面から全部5cmずつで正確にきれいにするとかというのではなくて、たくさんある上でガーッとやっていきますから、上から打ち下ろして、けっこう深くまでできちゃうところは、10cm仕上げとかやっているけど、何か入れにくいところはぎりぎりもっと手前で止まっているかもしれないし。そういうようなのを積み重ねでやるのがという。それは今、麓先生がいわれたような性格だからということだと思います。 |
| 麓構成員 | それと、石垣の積み直しもありますよね。積み直した際に、元の高さや位置がずれるということがあるから。 |
| 小濱座長 | 石垣というのはこちらの石垣ですか。門のほうの石垣。そうですか。そちらも積み直されていると。また分からなくなってくるな。 |
| 麓構成員 | 上のほうに小さい矢穴があったりするよね。 |
| 事務局 | その矢穴にちょっと着目して石垣を観察したところ、だいたい表二の門の屋根より上ぐらいのほうでしか小さい矢穴は確認できていなかったの。矢穴だけで見ると、雁木の部分の石垣は生きている可能性もあるんじゃないかなと考えられます。そこも今後検討を続けたいと思っています。 |
| 小濱座長 | 復元のことを考えたら、雁木の情報がある程度分らないと復元できないですね。この絵図に描いてある段数があったのかなのか、どのぐらいの高さまで雁木があったのか。そこらの情報という |

| | |
|-------|---|
| | のは、これから得られる見通しはあるのですか。何か掘っていったら。 |
| 事務局 | そうですね。明確にこうあるというふうには断言はできません。より多くの情報を収集できたという考えで、来年度は全面で状況確認できたらと考えています。 |
| 麓構成員 | それと、城内の他の雁木の石材と、段数の関係で、そして勾配ね、そういうものも勘案して、この場合だと何段で、こういう勾配だというのは、ある程度は出てくるよね。だから、もともと雁木が付いたのは確認できた。その段数と位置については必ずしも発掘の成果だけでは決定できない。城内全体の雁木も調べたうえで、こういう勾配、こういう段数が最も可能性が高いということで、復元することは可能ですね。 |
| 小濱座長 | 復元に当たっては、完全に過去の事実を確認はできないから、ある程度推定の復元が入るということはあり得るわけですか。 |
| 麓構成員 | あり得ますよね。 |
| 溝口副座長 | 今日ご報告いただいて貴重なのは、積み直している可能性が高いですよね。現状残っているやつも積み直している可能性がある。段が残っているからそのままではなくて、それから場合によってはその時の施工の具合なんだろうけど、本来仕上がっているところが裏に入っちゃってというような。それは積んでいる時にどれだけそこを見立てて、ちゃんとデリケートに積み直したかどうかということでもあるでしょうけど。雁木の石材そのものもひっくり返っていないかとか、その仕上げの状況とかも注意深く見ながら、現状の現存する部分も、現存するからそのままスポッと持ってくるのではなくて、当然そこも積み直している可能性があるとする、石材の状況も注意しながら現存の遺構の数値も見えていかないといけないよねということが分かったということは、逆に言うと、現存する雁木もある部分では批判的に見ていかないといけない、ということが分かったわけですから、そういう意味ではとても成果があったのではないかと。もっと積み直しがなければ、今のところも見て、だいたいこんな感じかと分かるんじゃないかと、簡単に私は思っていたのですけど。必ずしもそうではないという。現存遺構そのものも慎重に扱わなくてはならない、ということが分かったのは非常に重要だと思います。 |
| 事務局 | 少し補足をします。前に先生方にお話しした内容の繰り返しになりますが、この発掘調査に入る前に資料調査をやっています。その時に金城温古録の文字情報で、雁木の角度については、10 度上ると9 度上がると。角度にすると 42 度というのが、文字情報として与えられています。東門のところに残っている雁木も、ぴったり 42 度という角度で一致してくるところまでは分かっています。それはお話しもしていると思いますけど。こういった調査で、例えばこれ |

| | |
|-------|---|
| | は浅はかな考えですけど、最下段さえ確定すれば、角度だけは分かるのかなと。確かに踏面と蹴上の高さは、まだ分からないにしても、角度が分かれば最後に平場がどれぐらいかまでの推測はできるのかなと考えています。今回みたいに据え直されているとなると、位置が変わっている可能性もありますし、まだまだ検討が必要なのかなと思っています。 |
| 溝口副座長 | そんなに変えないと思いますけどね。 |
| 小松構成員 | もともと使われていた石は、どこかにあるんですか。城内に。 |
| 事務局 | 正確なことは分からないのですが、城内でもすごい数の雁木が撤去されています。今はなくなった大手馬出、きしめん亭のあたりもずらっと雁木が本来あったと、絵図に描かれています。それがどこにいつているのかというのが掴めていないのですが、城内を歩きながら縁石とかを見ていると、かなり雁木に近いような石材があるので、そういったところに転用されている可能性はないかなというふうに思います。 |
| 小松構成員 | そうすると、今掘り出したものもどこかから持ってきた可能性があるということですか。 |
| 溝口構成員 | 一番下の、現地のもものは、現地にそのままのものかも。 |
| 小松構成員 | 推定していいわけですね。それが回転しているというのは、単に土留めの役割に変更したからということですか。 |
| 事務局 | そうですね。 |
| 小松構成員 | もともとあったのだったら、回転させる必要もないのかなと思ったものですから。 |
| 麓構成員 | だから積み直しをする時に、乱暴なことをしたら、ひっくり返ることはあるね。いつもちゃんとした修理じゃないから、そういう可能性はある。ただ、石垣には雁木の痕があるから、雁木はここにあったんじゃないか。だったらわざわざ、それが全部どっかにいって、別のところの石をここに持ってくるというのも考えにくいから。積み直して、それが一番下のがそのまま残っているとは言いませんけど。積み直した時に動いている可能性はある。 |
| 溝口副座長 | 一番下のところで残っている最下段のところも、これが据え直したのか、これは動いたかとか、もう分かりませんものね。下はまだ見ていないですか。 |
| 事務局 | そうですね。一応、 |
| 溝口副座長 | そうか、図12のところできっきのあれですね。瓦片が入っている |

| | |
|-------|--|
| | から、一番下も積み直しているということだね。かなり大々的にやっている。 |
| 小濱座長 | 結局、雁木を崩しているのは、石が必要だったんですか。昔。 |
| 麓構成員 | 例えば陸軍の入ってきた時代に、雁木の石を外して、城内の陸軍の施設に使いやすいように使っている可能性もある。 |
| 溝口副座長 | ありそうですね。 |
| 小濱座長 | 控柱のことを考えたら、あんな掘っ立て柱にするよりは、やっぱり雁木の上に控柱を置くほうが、ずっと耐久的には優れていると思うんですよ。あんな掘っ立て柱にすると、せいぜいもって10年か20年ですよ。 |
| 麓構成員 | もともとそれは足元が腐るから、石造の掘っ立てにして、その上と木の間を金輪継にするということは、他のお城でもよくやるんですけどね。 |
| 小濱座長 | それはね、それをいったら金輪継はしますね。 |
| 事務局 | 今回の議論のきっかけが、まさにおっしゃる通り、控柱の足元が今傷んでいるのを修繕するにあたって、雁木という条件で修繕するのか、今の土塁のままで修繕するのかというところが、この議論の出発点だったと思うので。 |
| 小濱座長 | 雁木だとそれは復元になるわけですから、復元に足るだけの証拠が出てくるかどうかでしょう。 |
| 事務局 | 復元が可能と見なせれば、復元したうえで控柱を直すんでしょうし。復元は現時点の情報では難しいということであれば、土塁なりの直し方を考えていくのかなと、その当時時点では考えていました。 |
| 麓構成員 | 今でもそうですね。 |
| 事務局 | 今でも、そう考えています。 |
| 麓構成員 | 今でもそうですが、できたら復元したいんですよね、雁木を。 |
| 事務局 | それは、いわれるとおりです。それはそのとおりです。 |
| 麓構成員 | だから、さっき私がいったのは、これだけの情報では復元できない、というのではなくて、石垣面にはそういう雁木がついたという痕はあるのだから、雁木はあったと。勾配や段数が分からないのであれば、その情報としてね、ここだけでは判断がつかないんだしたら、周辺を調べるなりして、何とか復元まで持っていきましょう、という話をしたんです。 |

| | |
|-------|---|
| 事務局 | いわれるとおりでと思います。 |
| 溝口副座長 | 極論でいえば、本丸御殿もそうですけど、創建当初という話じゃなくて、積み直したとしても、金城温古録である勾配と東門があっ ていて、今回の遺構で調査したものもそれでほぼほぼ過不足なく取 まるのであれば、一番蓋然性が高いわけですよ。それは復元に足る 情報かなと、これだけ揃っていればとは思いますが。 |
| 事務局 | 土塁の角度も確かぴったり 42 度ぐらいだったんだよね。 |
| 事務局 | そうですね。はい。 |
| 溝口副座長 | それともう一つ、大正 8 年のあれでなくなっているという話の時 に、それは何か契機があるんですか。大正 8 年に。 |
| 事務局 | 近い時期だと、やはり濃尾地震が一番大きい理由になるのかなと は考えています。 |
| 麓構成員 | 濃尾地震はだいぶん時間経っているね。明治 24 年でしょ、濃尾 地震は、それから大正 8 年はちょっと時間が経ちすぎているよね。 濃尾地震の災害復旧ではないね。 |
| 溝口副座長 | 特にそのへんで何か城内で。大正 8 年だと、まだ陸軍ですか。 |
| 事務局 | 濃尾地震の後、榎多門をもらったのは何年だったかな。あれが修 理ですよ。 |
| 溝口副座長 | 大正の時は離宮期。 |
| 事務局 | 時期としては離宮期ですね。明治 26 年から離宮に。 |
| 事務局 | 濃尾地震の復旧で榎多門を持ってきたのが明治 43 年なので、大正 8 年までいくと、まだ 10 年前ぐらいには少なくとも被災部分の復旧 はしていますね。ここではないですけどね。正門ですけど。 |
| 麓構成員 | それは復旧といえるかな。ない時代がずいぶんあるわけでしょ。 |
| 事務局 | ない時代が 20 年ぐらいあります。ごめんなさい。20 年はないです。 |
| 事務局 | 絵図は大正 4 年では描かれていて、大正 8 年以降で描かれていな い。 |
| 事務局 | そうか。そうだった。 |
| 溝口副座長 | 描かれているからといって、というのもありますけどね。 |

| | |
|------|--|
| 事務局 | それはもちろん。 |
| 小濱座長 | この来年度の計画は、残った部分を発掘して確かめようということなんでしょうけども。来年でもう発掘は終わりですよ。 |
| 事務局 | 一応その予定です。 |
| 小濱座長 | その時点で、ここの修復は復元でやるのか、前通りの掘っ立てでやるのか、それは決めなくてはいけないですよ。修復は、あまり先延ばしはできないと思います。今の土塀の瓦屋根があれだけ崩れているような状況では、どんどん劣化が進んでいくばかりですからね。そのうち修復はしなきゃいけないと思います。門も含めて。来年のその発掘が終わった段階で、それなりにここの決断をしなくてはならない。決断というと大げさですが、修復なのか、復元なのか、修理なのかということです。 |
| 事務局 | 来年度の発掘調査が終わりましたら、翌年、復元検討というかたちで、先生方にお示しできるものを作りたいと考えています。 |
| 小濱座長 | それでは来年の発掘で、いい資料が出てくることを願うばかりですね。 他はよろしいですか。ご意見は、それでは今日議論したことをふまえて、来年度の発掘をやっていただきたいということですね。 これについては、全体整備検討会議では出ていましたよね、同じものが。 |
| 事務局 | はい。 |
| 小濱座長 | ここからの結論を報告する必要はあるの。 |
| 事務局 | 今日の議論で、全体整備検討会議に戻してよろしいということであれば、全体整備検討会議のほうに。もちろん修正あれば、修正したうえでお戻しをする予定をしています。 |
| 麓構成員 | いや、全体会議は先に問題意見は出なかったから、いいんですよ。 |
| 事務局 | 一応、瀬口座長からは部会で一度検討してから、もう一度報告してください、ということでしたので、戻そうとは思っていますけど。全体整備検討会議としては、ご意見は確かにいただけていないですね。 |
| 麓構成員 | 何か、時間ばかりかかる。だって、あそこでそんなに何も問題視されなかったんだから、ここで検討して、ここの意見は出て、それを来年度のこの調査に反映するだけで、また全体整備検討会議に諮る必要はないと思うのだけれど。 |
| 事務局 | はい。 |

| | |
|-------|---|
| 小濱座長 | せいぜい報告だけでいいですよ。 |
| 溝口副座長 | 報告事項でいいと思いますよ。 |
| 事務局 | いわれるとおりでと思います。き損の事故以降、一応このやり方をやらせていただいている、全体会議で部会に下ろすかどうかを判断するという。 |
| 麓構成員 | それだったら、部会の前に全体整備検討会議をやる方がいいんじゃない。全体整備検討会議で、こういう議題を出さない方がいいんじゃない。 |
| 事務局 | そうですね。き損からこれで3年になりますので。 |
| 麓構成員 | というより、今のこの雁木の話、なぜ全体整備検討会議に出したの。そこで意味がないじゃない。もう一度ここで検討してください。で、検討して、意見が出たらもう一度戻すというのであれば、ちゃんとここで議論したものをあげればいい話で。あの段階で、全体整備検討会議の議題として出すのがおかしいんじゃない、そうしたら。 |
| 事務局 | き損以降、現状変更許可の申請を出す時にはその手順でやってきているものですから、今回もそれに従ったということなんですけど。確かに一律そうしなくてもいいというのは、そうですね。 |
| 小濱座長 | 全体整備検討会議の瀬口座長がいていたのは、あの時は意見が出なかったけど、部会で検討してくださいということでしたよね。それで部会で検討して、検討した結果をまた戻さないといけないのですか。 |
| 事務局 | 今はそういうルールで、私たちはやらせていただいています。ただ、ずっと検討を長期間続けているようなものは、わざわざ全体会議からスタートせずに、部会で検討したのを全体会議に報告するというかたちでやっている事例もあります。それは麓先生がおっしゃるとおりだと思います。 |
| 麓構成員 | これだって初めてじゃないものね。 |
| 事務局 | 初めてではないです。そうやってやったこともあります。 |
| 麓構成員 | 雁木のことも。 |
| 事務局 | はい。それは先生ご指摘のとおりだと思います。 |
| 小濱座長 | 今日報告していただいたことは、ここの部会で検討して、大幅にどこかを再検討すべきだという結論にもならなかったわけですから |

| | |
|------|---|
| | ね。今日報告していただいたのは、部会としてはそれなりに認めると。今後、来年度の発掘に際しては、いろんな留意点を今ご議論いただいたんだから、それに従ってやればよいということです。 |
| 事務局 | 埋蔵文化財の部分に入ってきますので、石垣・埋蔵文化財部会でもご意見をいただこうと思っています。そちらの意見とあわせて、全体整備検討会議に報告をさせていただいたうえで、文化庁へ申請したいと考えています。 |
| 小濱座長 | 文化庁に申請しないといけないのか。その申請のために、全体整備検討会議で議論していただくと。 |
| 事務局 | これは文化庁に申請しなくてはいけない内容ですので、こういう手続きを取ってやっています。 |
| 小濱座長 | 二度手間かもしれないけど。それなら、手続き上必要ならしょうがない。 |
| 麓構成員 | 二度手間どころか、三度手間じゃない。今度、石垣・埋蔵文化財部会でもまた審議してもらって、そこでまた違う意見が出てきたら、今度こっちの部会でもまたもう一度、石垣・埋蔵文化財部会でこんな意見が出てきましたって、また検討するの。 |
| 事務局 | いつもだいたい、ご意見をいただき、軽微の修正であれば、もう修正だけして戻すというかたちにはしています。ちょっとした修正でもう1回部会にかけるのも無駄なので、そこまではしていません。 |
| 麓構成員 | 今回のだって、こういう点に注意して、発掘調査を来年度やってくださいね、という内容じゃないですか。いろいろいいましたけど。それを全体整備検討会議にかけるという話をするから、そんな二度手間という話をしたら、今度は石垣・埋蔵文化財部会にもかけないといけない。そこでまた意見が出てきたら、また戻すというようなことをするから、何度も議論ばかりやって、出てくる意見もどの程度のことを重要視しているのか分からないけど、何度も何度も戻したり議論したりというようなことで、非常にロスが多いね。 |
| 事務局 | いわれるとおりです。 |
| 麓構成員 | この間、とにかく全体整備検討会議で少なくともこの話をしないでほしかったね。そうしたら。ちょっとでも時間を短縮するために。あの会議で一通り説明して、意見が出なくて、もしそれ以上細かいことがあるんだったら、こっちで検討してください、というぐらいのことで済んだのに、そこで出てきた意見をまた戻します、と言うんだったら。 |
| 事務局 | 確かにこれは継続案件ということで、出さなくてよかったかもしれません。失礼しました。 |

| | |
|------|---|
| 麓構成員 | とにかく、何度も何度も同じようなことを部会なり、全体会議なりを変えて、議論ばかり重ねないでほしいというのが素直な意見です。 |
| 事務局 | わかりました。そこは改善を図ってみます。 |
| 小瀨座長 | 復元に向けて一つ努力してほしい、ということですね。復元に持っていきたい。 |
| 事務局 | 今回の戻すところだけのご勘弁ください。戻すことはしないといけないので。 |
| 小瀨座長 | では、そういうことでよろしいですか。今日のご議論いただいて、来年度の発掘に関して注意していただくということで、来年に反映していただきたいですね。 はい、その次の議題にいきます。その次の議題は、余芳の実施設計についてということで、事務局からご説明をお願いします。 |
| | (2) 余芳の実施設計について |
| 事務局 | 余芳については、名勝において余芳を移築再建することの現状変更許可申請が12月16日付でいただけていますので、報告します。 現在の進捗状況としては、実施設計を行っている最中です。年度内に、今年度も残り2か月程度となりましたが、この期間を使い、部材の補修工事を行っていきたくと考えています。本日この議題の終了後、委員の皆様方には部材小屋まで、足元が悪くて大変恐縮ですが、ご意見をいただけるとありがたいです。本日は、実施設計の方向性についてご相談できればと考えています。事項としては全部で3点です。 まず、1点目が礎石の検討についてです。資料1ページをご覧ください。資料左側に掲載している礎石は、発掘調査時に撮影された余芳の南西隅の礎石の写真です。現在は埋め戻しされているので、直接ご確認していただけないので、写真で失礼します。写真からは、天端は平坦ではなく、割肌を見せて自然になるような礎石に仕上げているように見られます。参考までに、城内の発掘調査で、他の場所にはなるのですが、確認された礎石の写真をご用意しています。別添資料の最後のページの写真、こちらになります。西の丸の発掘調査、御蔵城宝館の前の調査の事例ですが、ちょっと似ている風合いの礎石ということと、年代が余芳の推定建設年が1823年ですので、六番御蔵が同じ年代に建設されていると聞きましたので、参考までにその時の発掘調査の礎石を出しています。その他の事例としては、先日来、二之丸庭園で発掘調査を行っていた築地塀の礎石や、薬医門の礎石もあります。ちょっと投影での資料で申し訳ありません。 |

| | |
|-----|--|
| | 資料印刷が間に合っていません。城内の参考となる事例としては、このぐらいかなということ、本日お示ししています。 |
| 事務局 | こちらが二之丸庭園の築地塀で、あちらが六番御蔵の礎石の写真です。5番の赤でかかったところが、写真上はよく似ていたものですから、それをアップにしたのが今お配りしている写真です。あくまで参考ということ、です。 |
| 事務局 | <p>あわせて、城内でいくつか石材が保管されていて、本日はいくつか隣の部屋にお持ちしてまして、実際に見ていただき、ご意見をいただければ、後ほどちょっと移動していただければと考えています。資料に戻りまして、資料右側には今お話したような名古屋城内の石置き場に保管している石材の写真をいくつか掲載しています。今後の整備に際して、可能であれば城内にある石材から風合いの近いものを探して、再現できればと考えています。</p> <p>続いて2ページ目をご覧ください。雨戸の検討になります。余芳の今後の活用については、現時点では常時は雨戸を閉めた状態での鑑賞として、特別公開時に雨戸を外して内部も見学いただけるようにしていきたいと考えています。前回の部会で、軒桁に残された折釘に雨戸を掛ける案を示しましたが、建具回りに設置するのが妥当だというご意見をいただきましたので、改めて建具回りに雨戸を取り付けた痕跡がないかを確認しました。その結果、写真を掲載している西側と南側の腰障子の鴨居部分の見付部分に折釘があることが確認できました。その他、垂木掛ですとか、開口部の上部の壁の貫等も確認したのですが、釘穴の確認ができませんでした。本日、その鴨居も、隣の部屋にお持ちしていますので、この後ご確認いただければと考えています。あわせて、昭和期に後補で付け足された鴨居にも折釘がありましたので、そちらの部材もお持ちしています。そちらをふまえて、資料右側に掲載したのが、一例として考えた雨戸の計画図になります。先ほどお話したように、雨戸を掛ける位置は前回の部会のご意見をふまえて、建具の位置としています。その場合に、西側と南側の引き違いの腰障子の箇所は、今は鴨居があって、腰障子しかはまっていないのですが、その鴨居を利用して、腰障子を室内に置いておいて、雨戸を常時は建てこむ案はいかがかと考えました。東側の付書院の腰障子部分には、既存の軒桁の位置と同じになります。ここには釘穴が残っていたことから、その釘穴を利用して折釘を設置し、雨戸を掛ける案か、もしくはこちらにも鴨居がありますのでそちらを利用する案と、2案が考えられるかなと考えています。北側の下地窓と南側の連子窓については、特に痕跡が見当たらなかったことを受け、壁貫や鴨居に新たに釘を打つということも検討していかねばならないのかなと。それについてはご意見をいただきたいと考えています。</p> <p>3ページには、今説明した雨戸を設置した際の立面図のイメージを掲載しています。</p> |

| | |
|------|--|
| | <p>4ページにいきます。最後の内容になりますが、自火報設備の点検口の検討についてです。従来より、余芳復元時には消防法上、自火報設備の設置が必要な旨をご説明していましたが、設置した後も今後維持管理が必要となってきます。法的的に年に2回と、10年程度で1回機器更新が発生することは必ず直面する事実となっています。今回の復元に際して人が入れる天井点検口を設置できないかと考えています。ただ、小屋裏には桔木が入ってしまっていて、桔木を避けた位置に点検口の設置ができないかと考えています。最後に別添資料で2枚、右肩に別添1、別添2と書いた資料があります。こちらで点検口を設置するならば、この位置でどうかという候補の位置を2か所、天井伏せで示しています。別添資料2のほうを見ていただいて、断面図で桔木との位置関係を示していますが、Aの場合は建物の中央部に来てしまうので、ちょっと目立ってしまうのでいかがかなと思います。ただ建物の小屋裏に火報を設置する都合上、中央部のほうがアプローチしやすいというメリットがあります。一方Bの場合は、建物の壁際になりますので、意匠上目立ちにくい位置で設置することが可能ですが、小屋裏の寸法が約600程度しか取れていないということから、かなりアプローチしにくい位置に設置することとなります。</p> <p>以上で説明を終わります。よろしくお願いいたします。</p> |
| 事務局 | 先にご覧いただいたほうがよろしいですかね。持ってきたものをご覧いただいた上でご意見を頂戴すると。 |
| 麓構成員 | まず、1つだけいわせてください。礎石の話ですけど、ここには自然石というふうないい方しかしていないですけど、石材の種類が変わったらいけないと思うんですよね。発掘で出てきた石材は、この写真からだけではちょっと読み取りにくいんですけど、石材は何か。少なくとも1ページの右の名古屋城内の置き石場にある石材は花崗岩だから、こんなもの使えないですよね。 |
| 事務局 | そうですね。 |
| 麓構成員 | これ論外ですよね。あとは六番御蔵の礎石の写真があって、これは割と写真を見たら分かるんですけど、これは安山岩かな。何ですか。 |
| 事務局 | 河戸石だったと思います。 |
| 麓構成員 | 河戸石というのは、砂岩ですか。 |
| 事務局 | 砂岩です。 |
| 麓構成員 | 余芳の礎石というのは砂岩ですか。 |
| 事務局 | その時点で記録がちょっと取れてなくて、今、写真しか材料がない状況です。見た目の判断からすると、河戸石かなという気がして |

| | |
|-------|--|
| | いるのですけれども、根拠がないです。 |
| 麓構成員 | 河戸石というのは、産地の名前がただけの話でしょ。花崗岩のことを御影というのと同じですよ。 |
| 事務局 | 養老のほうで見られる硬質な砂岩です。 |
| 麓構成員 | それに近そうですか。そして、今回の発掘で出てきたものも同じような石材ですか。もう今さら確認しないわけですよ。確認するんですか。石材が何か。それはどっちですか。 |
| 事務局 | そのところが最終判断をしていないということで。もろもろ分からなかったところがあって。再発掘するかという話もあったと思うんですが。そうですね、 |
| 麓構成員 | それで、とにかく再発掘して、石材の確認をしてというんだったら、それに合わせたもので、城内にあればそれでいいし、なければ購入するしかないと思っているんですけどね。少なくとも花崗岩を使うことは、ダメだと思うんですよ。それは、この礎石だけではなくて、蹲の石がありましたよね。あれだって、残っている石の石材が何で、そしてそれを埋め戻して上に新しくするにしても、例えばそういう確認できる石材については、それと同等のものを使う、同じ石材を使うとするのか。本来はそうすべきだと思うんですけどね。だから、前回の発掘調査の時に、ちゃんと石材まで記録してなかったので再発掘します、というんだったら、私はそれでいいと思う。そうじゃないのに、何にしましょうか、とりあえず隣の部屋にあるものを見て、使えるかどうか検討してください、というのはちょっと違うと思うんですよ。この石については、 |
| 小濱座長 | 1 ページの左のこの石はもう埋めてしまって、今は見えないわけですか。 |
| 事務局 | 埋め戻されています。 |
| 小濱座長 | それは石の種類をきちんと専門家に見せたほうがいいね。 |
| 溝口副座長 | 蹲は確認したのですか。 |
| 事務局 | 蹲も、そちらも写真しかなくて、材質は確定していない。そちらはむしろ再発掘して見たほうがいいという話があったのは、そちらかと今記憶しているのですが。 |
| 溝口副座長 | 庭園部会的にはありえないんじゃないですか。石材の種類をまず細かく落としていこうというのが、庭園の発掘のいろはの、い、のような気がするんですけど。それが調べられていなかったというなら、それで今度、上を整備するのに、というのは、発掘した時に庭園部会で確認はしてもらっていないのですか。遺構そのものを。 |

| | |
|-------|--|
| | |
| 事務局 | 当時の状況を知る者がいなくなってしまって、申し訳ないのですが、見てはいただいているのですが。 |
| 麓構成員 | 記録に取ってないんだったら、もう分からないよね、正確なことは。 |
| 事務局 | 専門家にも写真でしか見ていただけないんですが。さすがに当然判断されないので。 |
| 麓構成員 | 当時の話ね。当時、石材をちゃんと記録を取ってないんだったら、発掘して、この石は何だとかということ記録してないんだったら、今さら写真を見て、ああだこうだと言ってもね、限界があるよね。 |
| 溝口副座長 | 隔靴搔痒の感といいますよね。 |
| 事務局 | ちょっと状況的には、この後のスケジュールを考えると、再発掘は非常に難しい状況です。 |
| 溝口副座長 | 場所はすぐ分かるんですよ。 |
| 事務局 | 場所は分かります。 |
| 溝口副座長 | 全部発掘するという話ではないわけだから。ピンポイントで礎石のところと蹲のところだけ。 |
| 麓構成員 | それは、名古屋城の単なる都合の話でしょ。 |
| 事務局 | 我々の事業実施の都合です。 |
| 麓構成員 | それだったらもう、こういうことは委員会にかけないでくださいと言いたいね。委員会にかけたら正論しかいいませんよ。ましてや、石置き場にある石材にこんなのがありますから、とって花崗岩の写真があったら、こんなもので礎石を作るつもりだったのかとって、その姿勢を疑っていますから。そこで、もう時間がないから再発掘することもできませんというのだったら、こういう委員会で検討する話ではないでしょ。委員会としては正論をいうだけの話で。それができない、名古屋城の事情でそういうものを無視してやるっていうんだったら、それしかしょうがないよね。 |
| 溝口副座長 | 他のところも、みんなそんな感じなんですかね。 |
| 小濱座長 | ここでは、これと同種の石でもって礎石を作ってください、というしかない。 |
| 麓構成員 | いうしかないですよ。もう一度、分からないんだったら再確認して。 |

| | |
|-------|--|
| 事務局 | 当時の記録とか、当時の担当者とか、もう一度当たりまして、石種が特定できるかどうかも含めて検討させていただき、そのうえでまたご相談させていただくということ。 |
| 溝口副座長 | それで分かるんだったら、もうそれでやればいだけなので。そういう分かった、 |
| 事務局 | 結論だけをお伝えして。 |
| 溝口副座長 | 復元は前提ですからね。それは材種も分かれば、それを使えばいいし。木でもそうですけど。分かっているならば、それを使うだけなので。 |
| 小濱座長 | ここでは、他の石を見せられて、これにしなさいとかそういうことはいえない。だから、少なくとも同種の石でもって礎石を作ってください、としかいえないですね。 |
| 溝口副座長 | さっきの雁木のところは段階を踏んで今回進めていただけると理解しているんですけども。例えば庭園を発掘するにしても、どういう情報を抑えていなければいけないという、庭園として整備していくうえですね、たぶん、そういうところが専門の先生方と現場とがきちっとすり合わせができていないから、庭園に行って、石種なんてとっても大事な話が、御影なのか、河戸なのか、全然違いますし。写真を見れば分かりますが。今後ちょっとそういうことがないようにはしておいたほうがいいんじゃないですかね。掘りました、掘ったけど庭園で一番大事な記録は取っていませんでしたというようにならないように。 |
| 事務局 | 手水の時もやはり石種が分からなくてということを指摘されて。再発掘してはどうか、みたいなことを先生方からもご指摘いただいて。さすがにそのために再発掘するというのは、あまりにも私たちとしては、あり得ないレベルの調査の失敗なのかということなので。 |
| 溝口副座長 | いや、失敗だと思いますよ。庭園の発掘って、石種なんて一番大事なので。形状だけじゃなくて、それで石種だとか、例えば加工痕があるかとかいうのは、観察の上では、少なくとも図面に反映されているのかどうか分かりませんが、調査されている毎日の作業日報とかあるわけですし。ここでこういう石種って書いてあるかもしれないし。そういう面でも、石種の調査もされていない、何にも情報がないというんだとしたら、それはちょっとかなり不十分の調査であったといわざるを得なくて。 |
| 事務局 | 私もですね、ちょっとさすがにそれはないだろうと思って、聞いてはいるのですが、今の時点ではまだ分かっていけませんので、もう一度調べます。すみません。 |

| | |
|-------|---|
| 溝口副座長 | 普通は作業日報だったり、その日に出てきた遺構のあれは必ず書き落としているはずだから。ここで出てきたといったら、やっぱり複数人で確認したうえで、分からなければそれを3、4人連れてきて、こうだよね、とやるような気がするんですけどね、現場では。名古屋城の発掘がどうかたちで進められたのか、何か担当者1人だけというふうじゃなくて、複数の目で遺物なり遺構をチェックするということをされていないと、とても危ない感じがします。 |
| 事務局 | 申し訳ありません。 |
| 小濱座長 | 石種がもし断定できなければ、再発掘して調べるということですか。物はあるんだから。 |
| 事務局 | それを最終手段として、検討します。 |
| 小濱座長 | そこは再調査してください。 |
| 麓構成員 | あともう1つ、向こうに行く前にね。小屋裏の自火報の、点検口の話で、AとBがあって、Aが1番近いけど上に桔木があるということですよね。これは日常的な点検のためということもあるし、毎年やるような点検のためということもあるし、あとは器具更新とか、何十年後か先に、またここから上に上がって行って器具を取り付け直すということがありますよね。日常的な点検だったら、AでもBでもできると思うんですよ。取り付け、取り外すとなると、小屋裏まで上がらないといけないでしょ。Aは何か狭くてたぶん上がれないということですよね。Bも上がれないような気がするんですけど。 |
| 事務局 | どちらも非常に難しいと思っています。 |
| 麓構成員 | そうですね。だから、それだったら、Bのこれは天井板でしたっけ。とにかくもう2コマ左にずらしたら、もうちょっと懐が広がって、この大きさでも上がれるんじゃないの。というふうに、とにかく上がれる位置に開けないといけないんじゃないの。どうせ開けないといけないんだったら。 |
| 事務局 | ありがとうございます。その時に、先ほど説明を割愛してしまったのですが、4ページの右下に断面のスケッチを描いていて、なるべく切断ラインが分かりにくいような仕舞いができたらと考えていて。この案では、当初の天井材ですので、竿縁の竹の節を狙って切断ラインを入れたいなというところがあって、このAとBの位置を考えたという次第です。 |
| 麓構成員 | それが2コマずらしたらそうはいかないの。 |
| 事務局 | そうはいかないです。 |
| 麓構成員 | 竹の節の関係ですか。 |

| | |
|-------|---|
| 事務局 | そうです。ただ、そこはそんなに気にしなくてもいいんじゃない、というご意見がいただければ、一番点検しやすい位置に設置できたほうがありがたいかなとは。 |
| 麓構成員 | その竹の節で切るといのはいいんだけど、それでももう少しうまく。スライドして、と書いてあるよね。別にスライドさせなくても、何らかの方法で外せればいいよね。 |
| 事務局 | そうですね。いわれるとおりです。スライドは関係ないです。 |
| 麓構成員 | 要するに上がれないと。普段の点検だけだったらこんなに広い範囲いらんし、上がるために広い範囲にするんだったら、上がれる位置に開けないといけないというのが意見です。あとは、どううまく細工するかというのは、この位置を先に優先して決めて、どううまく細工しようかという話になると思います。 |
| 事務局 | ありがとうございます。 |
| 溝口副座長 | AとBのちょうど真ん中ぐらいが、別添資料の2で見てもよさげな感じですよ。 |
| 小松構成員 | 自火報設備を棟の位置に付けるのですか。小屋裏の。 |
| 事務局 | 一番高いところに付けるように、消防からはご指導いただいています。 |
| 小松構成員 | ということは中心ということですね。 |
| 事務局 | そのとおりです。 |
| 小松構成員 | そこに近いほうがいいんですね。 |
| 事務局 | なるべく近いほうで、桔木を避ける位置に設置できるのが一番ありがたいです。 |
| 小松構成員 | だとするとAのほうがいいんじゃないですか。 |
| 事務局 | 桔木が斜めに来ていまして、上がった瞬間に頭を打つみたいな感じですよ。こういう感じで、よけながら上がるのがAかなと。 |
| 麓構成員 | 日常的な管理の時は、上がらなくても棒だけでいいわけですよ。だから、それはどこでもいいんだけど、器具の取り替えですよ。30年後ぐらいの。 |
| 事務局 | 10年ぐらいという話です。 |

| | |
|-------|---|
| 麓構成員 | 今10年なの。 |
| 事務局 | メーカーが保証できるのが10年だと思います。それを超えて住宅だと普通に付いているかと思いますが。 |
| 小松構成員 | これは指定文化財ですから、変えざるを得ないですね。 |
| 事務局 | 天井に上がることを考えると、麓先生がいわれたような場所が理想形といえば理想。小松先生がいわれたのは最短距離なんですけど、この桔木があって、開けてはみたものの入りづらいという。 |
| 小松構成員 | 進んでいけるんですか。Bのところから。 |
| 小濱座長 | Bのところを1コマずらしたらというのは。 |
| 事務局 | 屋根がありまして、断面で見えていただくと、資料2のほうを。 |
| 麓構成員 | 狭すぎて、そこから梁の上に上がっていけないんじゃないかな。 |
| 事務局 | 上がった瞬間、天井があって入れないという、今度は。 |
| 麓構成員 | だから、左に2コマずらしたほうがいいんじゃないかという。 |
| 事務局 | ありがとうございます。 |
| 小濱座長 | そうすると、下の天井に廻縁かなんかがある。そこらはちょっと都合が悪いわけですね。 |
| 麓構成員 | だから、そこを工夫しないといけない。 |
| 小松構成員 | 雨戸はいつも閉めておくのですか。それはどういう意味合いですか。 |
| 事務局 | 腰障子の状態で、突然の雨ですとか、 |
| 小松構成員 | 雨に濡れると嫌だと。 |
| 事務局 | そうですね。職員が駆けつけて雨戸を設置できるような維持管理の体制が名古屋城側としては難しいかなと。 |
| 小松構成員 | 開けた時はどこに置くのですか。 |
| 事務局 | ちょっとそこまでは考えていない。 |
| 麓構成員 | それは考えとかないといけない。保管場所は裏側でもいいんだけど、それはこんなふうにして立てかけて、壁に傷を付けません、という設置場所まで考えておかないといけない。 |

| | |
|-------|--|
| 事務局 | 活用の計画としてちゃんと考えます。その通りです。 |
| 溝口副座長 | やはり、梁の位置を考えると、AとBの間ですね。これね。直下のAよりは、寄っていたほうが上がりやすいと思うんですね。 |
| 小濱座長 | それはそれで、500角の点検口が、500角ぐらいですけど、この穴の周辺に人間が入るために荷がかかることはないの？ |
| 麓構成員 | 梁に直接かかる。脚立から直接梁にかかる。 |
| 小濱座長 | 脚立から直接上がる。そうしたら、天井には荷がかからないの？ |
| 溝口副座長 | ここに梁がある。寄ってもここに上がって、ここに棟束があるのでここをこう上がるので。 |
| 小濱座長 | それなら、懐を取れるところへもし移動できるなら、それが一番いいんじゃないかな。 |
| 事務局 | では、鴨居を見ていただいてよろしいですかね。 |
| | (移動) |
| 事務局 | こちらが当初材の2本になります。これが昭和期、または明治期からかもしれないのですが、付書院の軒桁部分に雨戸用として新しく設置された、後に付け足された鴨居です。 |
| 麓構成員 | これは簾でしょ。雨戸用の一筋の鴨居に付いたものだから。こちらは簾。 |
| 事務局 | これが簾というのは確認できています。 |
| 小濱座長 | これは溝が2つあるから、障子の鴨居ですか。 |
| 麓構成員 | そうです。さっきの南と西のね。そこに台風の時のために板戸は欲しいと。これが掛板戸の金具かどうか、という話だよな。 |
| 小松構成員 | これとこれで100年ぐらい違うってことで。もっと違うの。 |
| 事務局 | これが19世紀の頭でして。こっちは仮に明治の移築の時であれば明治24年ですので、明治24年と文政10年だとそうですね、50、60年。ただ、大矢家の1回目の時にあったか分からなくて、2度目になると昭和になりますので。どちらの移築で付けたかは分かりません。 |
| 小濱座長 | これは杉材かな。これほどこの障子ですか。 |

| | |
|------|--|
| 事務局 | これは南面の、引き違いの掛け障子の鴨居。 |
| 麓構成員 | 掛板戸じゃないよね、これは。掛板戸だったら、板戸のほうにももっとしっかりした輪っかが付くでしょ。それを掛けたり、外したりしていたら、ここはもっと傷が付くよね。 |
| 事務局 | ここにですか。 |
| 麓構成員 | ここに掛けるという話でしょ。それではないね、という話。 |
| 事務局 | 掛板戸ではない。 |
| 麓構成員 | この大きさですから、1つがね。1つがここで。これだけの板戸を掛けるとしたら、相手のほうにも輪っかがあるから、輪っかを付けたり、外したりしている間に、ここはもっと傷むよね。そんな痕がないから、そういう金具の付いた掛板戸ではなさそうだという話。でも、今度の活用上は板戸が欲しいので、雨戸を、それは障子を外して、そして板戸をここに入ると。それはそれで僕はいいと思っているんだけどね。 |
| 事務局 | ありがとうございます。今、西面と南面はその考え方で考えた時に、今度、それ以外の3か所なんですけど。 |
| 麓構成員 | あれはそのまま掛けたらいいんじゃない。それ残っているんだっけ。 |
| 事務局 | 釘穴は残っています。 |
| 麓構成員 | そっちは、そういうものを掛けたような痕がある、ない。 |
| 事務局 | 後ほど実物を見ていただければと。 |
| 事務局 | 東面は穴が残っていて、あと窓2つは、下地窓と連子窓はまったく痕跡がないので、新規に何かしら打たないといけない。 |
| 小濱座長 | 大矢家はこれを使っていたということですか。 |
| 事務局 | そうです。 |
| 小濱座長 | これはどこにあったの？ |
| 麓構成員 | 別の位置。大矢家は別の位置にこれを付けていた。縁の外側の話。 |
| 事務局 | 外側です。 |
| 小濱座長 | これと同じ位置じゃないわけね。 |

| | |
|-------|--|
| 溝口副座長 | 早いといつでしたか。 |
| 事務局 | 早いと明治24年。一番早くて24年。5年か。すみません。1年間違っていました。明治25年です。 |
| 小濱座長 | 板戸が引き戸になっているわけね。 |
| 麓構成員 | にしようというね。もし付けるんだったらね。 |
| 事務局 | そうです。 |
| 事務局 | 今回の活用上の整備で。 |
| 事務局 | いわゆる復元というかたちでは根拠がないので、これは建物を保護するというので、復元ではなく付けるという扱いです。 |
| 小濱座長 | 敷居はどうなっているのか知らないけど、雨が入りやすいよね。板戸が直にはまってどうなるのか。敷居はどうなっているんだろうね。 |
| 事務局 | 敷居は同じような。 |
| 小濱座長 | 同じような。じゃあ、水が中に入ってくる。 |
| 麓構成員 | それ以外しょうがないです。腰障子よりかはまだいいという話だから。 |
| 事務局 | まだマシという。障子のままで露出はちょっとあり得ないので。 |
| 麓構成員 | その板戸を、軽い、薄い板戸にせざるを得ない。雨戸のような頑丈なものではなくて。この中に入れようと思うと。 |
| 事務局 | それはその通りだと思います。 |
| 麓構成員 | でも、障子よりはいいと思う。 |
| 事務局 | ちょっとまた見た目なんかは、 |
| 麓構成員 | 掛板戸にしたって軽いもんだしね。よそにある古い掛板戸も、本当に軽いものですよ。そうでないと付けたり外したりができない。普通の一般の人で。だから、軽いもんですよ。 |
| 小濱座長 | 使わない時は板戸にしておくわけですか。障子は中にしまっておくんですか。 |
| 事務局 | 中にしまっておこうかと。特別公開ということで、少しプレミア |

| | |
|-------|---|
| | 感を出せたらいいなど。 |
| 溝口副座長 | どこに行っても、たいがい茶室はもう全部雨戸が閉まっています。使う時にしか開けない、全部。昔は、下々のものが全部付け替えますから。 |
| 小濱座長 | 時々風通しをしないと、だんだん湿気が出てくる。湿気るから。 |
| 事務局 | そうですね。それはちょっと考えています。 |
| 麓構成員 | それは板戸だって開けたら風は通る。引き違いだから。 |
| 事務局 | そうですね。ありがとうございます。 |
| | (移動) |
| 小濱座長 | よろしいか、もうだいたい結論は。礎石については、同種のものにしてもらうということで。それから点検口については、AとBの間でやりやすいところにしていただくということで。それから、雨戸はこのままでよろしいということですか。問題なしと。 |
| 事務局 | 余芳の雨戸ですけど、外した雨戸を置く場所はちゃんと定めておきます。 |
| 小濱座長 | 公開日にね。中に入れるわけにはいかないから。 |
| 小松構成員 | 雨戸の内側って、防水層とか、撥水層とか付けておかないのですか。 |
| 事務局 | 今回は復元ではないので。 |
| 小松構成員 | そうしたら、雨の心配を考えるんだったら、内側に1枚入れておけばいいような気がしたんですけどね。 |
| 事務局 | また検討してみます。 |
| 小濱座長 | 麓先生、結論ですけどね。礎石については同種のものにしていただくということ。調べていただくということ。点検口はずらしてもいいから、やりやすいところに、AとBの間でもいいからやっていただくということ。雨戸については、もうこのやり方で構わない。それでよろしいですね。漏れてないですね。 |
| 麓構成員 | はい。 |
| 小濱座長 | ということです。 |

| | |
|------|--|
| 事務局 | はい、ありがとうございました。 |
| 事務局 | それでは、天気が悪い中、大変恐縮ですが、部材修復のほうを少し、現場というか、部材の小屋でご覧いただけると。 |
| 小濱座長 | 余芳の小屋。あそこまで歩いていくの。 |
| 事務局 | なるべくぎりぎりまで車で。 |
| 小濱座長 | そうですか。 |
| 事務局 | 東門まで行って、門から先は歩いていただくかたちになってしまうんですが。 |
| 事務局 | では、部会としては以上ということにさせていただきます。たくさんのご意見をいただきまして、ありがとうございました。また検討させていただきます。ありがとうございました。 |